

2020年12月27日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「希望」

聖書：マルコによる福音書13:28～31

マルコ福音書が記す終末論の最後の部分。当時のユダヤ社会は、ローマ帝国の統治下にあった。政府に追従する者は繁栄し、そうでない者は貧しくされていく。差別化は深刻を増し、反乱が頻繁に起こる状況にあった。「世も末だ」と語る者は、少なくはなかったであろう。そのような時代背景の中で、終末論は暗く、虚しく、恐さをもって語られていく。

では、イエスはこの終末論をどのように語っておられるのか？ イエスは「いちじくの木から教えを学びなさい」と言う。イチジクの木は、「枝が柔らかくなり、葉が伸びると、夏の近づいたことが分かる。それと同じように、・・・」と、終末を「夏の実りの時期」と重ね合わせている。私たちは終末と聞けば、当時のユダヤの人々と変わらず、悲劇的な破局の時を想定するものではないか。その点ではむしろ、夏が来るというよりは「葉っぱが枯れて落ち始めたら冬が来るのが分かる」と言った方がしっくりくるのではないか。しかしイエスは、実りの季節である夏を待ちこがれるような言い方で終末を語る。

イエスがベタニア村からエルサレムに上る途中、実のならないイチジクに腹を立て呪って枯らしてしまった出来事があった。あの時イエスは、空腹のどん底にあったと考えられる。ベタニア村という貧しい村に滞在していたイエスは、その人々と共にあったがゆえに空腹であったのであろう。それは、貧しい人々と共に生きようとし、その悩みや屈辱、その希望を共に分かち合おうとしておられたという事。イエスは、きっといつもイチジクの実りの季節を待ちこがれていたのではなかったか。道端に生えるイチジクは、その枝に実を付けるとき、貧しい人々や旅人に喜びを与えるものであったであろう。

イエスは、終末とは「そんなものだよ」というのである。そんな終末を、そんな時代の到来と一緒に待ち望もうじゃないか。イエスの思いはそこにあるのかと思う。将来に希望の見えない時代の中、当時のユダヤには大変恐ろしい終末の予言が横行し、人々は緊張感の中で自分の身を守ること、自分の救いを確保すること、他人のことなどかまっていられない時代。

イエスは、暗く、混沌とするこの世の中にあっても希望を語る。あなたの傍らにキリストが来るまでは、あなたの友、あなたの隣人の傍らにキリストが来るまでは、「この時代は決して滅びない」、「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」と、どこまでも諦めずにイエスは「希望」を語る。(神谷)